

10 名古屋における太田正雄

長門谷 洋治

太田正雄(木下李太郎 一八八五～一九四五、本年は没後五〇年)は赴任大学として南満医学堂(一九一六～二〇)愛知医大(現・名大医学部 一九二四～二六)東北帝大医学部(一九二六～三七)東京帝大医学部(一九三七～四五)の四をもったが、このうち在任期間のもっとも短いのが愛知のそれで満二年間である。太田の愛知への着任に関しては「太田正雄の愛知医大教授就任について」と題し略説した(第八六回総会、本誌三一巻 二三八～二四〇 昭和六〇年)

愛知医大時代の太田については延広真治氏の詳しい調査がある(①名古屋における木下李太郎 李太郎記念館シリーズ四号 昭和四七年 ②木下李太郎——名古屋そして俳句『太田正雄先生生誕百年記念会文集』所収 昭和六一年)。こ

の生誕百年記念会文集には谷野博氏の「愛知医科大学時代の太田先生」なる小文もある。本文集の年譜より、愛知時代のそれを抄出すれば以下である。

大正一三(一九二四)年 三九歳。八月 マルセイユを発ち九月一日神戸着。一〇月 愛知医科大学教授となる。石田元季の知遇を得、小酒井不木らと歌仙を巻く。

大正一四(一九二五)年 四〇歳。三月 愛知医大における皮膚科学会総会で「人間及動物ノ真菌性疾患並ニ其原因菌」を特別講演。四月『改造』に発表の『口腹の小説』は未完におわり、以後小説を執筆せず。八月 京都、安土に旅行。

大正一五(一九二六)年 四一歳。一月 紀行『支那南北記』刊行。二月 虫垂炎発作で五〇余日休養。三月 帝都復興局土木部長の次兄圓三自殺。六月 虫垂炎手術で一カ月入院。八月 休養のため伊東へ。神戸行。一〇月 東北大学医学部教授に転任。

このように名古屋での後半は虫垂炎手術をしたり、兄の不幸があったりして良い状況ではないが、文学・医学面での活動に衰えはみえない。彼は早くから真菌学に関

心をもっていたが、大正一〇（一九二〇）年、パリのサン・ルイ病院でサブローに師事して研究を深めた。福代良一氏によると、太田の真菌関係の原著は三九に及ぶが、大正一一（一九二二）年から昭和二（一九二七）年までの六年間に二五篇が集中しており、これはバリ留学から愛知医大在籍時代にあたる。論文も仏文によるものが多い（一一篇）ちなみに太田・ランジュロンの真菌分類法（一九二三）は有名である。

土肥慶蔵のもとにムラージュ製作の名人 伊東有（一八六四～一九三四）がいたが、その弟子に長谷川兼太郎（一八九一（九二？）～一九八一）という人がいた。長谷川は大正五（一九一六）年名古屋大学に移る。これは愛知医大の田村春吉の依頼ともされるし、当時東大に居た太田の推挙によるものかもしれない。そして太田が南満医学堂に赴任中の大正九（一九二〇）年、長谷川は同医学堂に移る。太田は間もなく同医学堂を離れるが、太田と長谷川とはその後も交流があったようである。昭和二一（一九四六）年まで長谷川は同地にあり（南満医学堂は一九二二年 満洲医科大学となる）同年帰国、再び名古屋大学医学部に勤

めることとなった。当時なお田村が同学にいたことと関係があらう。退官したのは昭和四一（一九六六）年であり、この間に製作した精巧なムラージュは膨大な数にのぼる。（衛藤馨氏らによる）このように太田の愛知時代に長谷川もいたわけではないが、両者と名古屋は縁があった。

太田は愛知時代、温泉療法について、大学内に人工温泉浴の槽を作った。これは大戦中に燃料事情などで使用されなくなり、手術室に改造、ここで一九四四年、新南京政府主席汪精衛の手術が行われた。太田の名古屋の住居は東区武平町二一六であった。彼はこのあと、東北大学を経て、ついに東大教授の職についた。このことは彼の望みでもあり、かつ土肥も期していたことであるといえよう。

（大阪府豊中市・皮膚科開業）